

日本の伝統工芸と絵画の鑑賞と指導

— アクティブラーニングを使って —

下濱晶子

要約

本稿は、札幌大谷大学の教育職員免許状取得の「教科に関する科目」の授業において、アクティブラーニングの手法を用いて鑑賞の授業を行った報告である。実践した「西洋美術史B」と「美術鑑賞論」は、教職課程必修の講義であるが、従来どおりの教師から生徒への一方的な解説では、中学校や高等学校の学習指導要領の目標を達成することは難しい。それ故今回の講義では、1. テーマの選択 2. パワーポイントなどの映像メディアとプリントで美術史と技法の講義 3. 席を移動し机を回りながら実物の作品を手にとって比較・鑑賞 4. グループ・ディスカッション 5. ミニッツペーパーに感想を記述 6. 授業時間外学習の指示 という順序でアクティブラーニングを行った。テーマは「日本の伝統工芸の鑑賞」で、特に「九谷焼と清水焼」と「九谷焼とヨーロッパ・ロココ様式の陶磁器」と「絵画と陶磁器」の比較を中心に行った。初めての試みであったので、課題点として、多人数の生徒が歩きながら鑑賞するには、教室の机と机の間に十分な空間が必要であること、時間配分にはタイマーなどを使用した方が有効であること、ミニッツペーパーの感想や授業時間外学習をフィードバックする時間を今後設けることなどが挙げられる。この授業により、1. パワーポイントなどの映像メディアによって、日本の伝統美術の歴史と技法を学ぶことで広く「アジアの文化遺産についても取り上げる」ことができた。2. 日本と西洋の美術の違いが認識できるようになった。3. 実用化されている伝統工芸を鑑賞することで、「生活や社会を心豊かにする美術の働きについて」理解を深められた。4. 美術館・博物館を活用する際の基本的知識とマナーを学べた。5. グループ・ディスカッションにより「作品について互いに批評し合う活動を取り入れる」ことができた。6. ほぼ全員の生徒が実物を手に取って鑑賞することや比較して鑑賞することが有意義であると考え、多くの生徒がまたこのような方法で授業を受けたいと述べたことなど大きな成果を挙げることもできた。

今後は、今回の結果を踏まえ、さまざまなテーマで他の「教科に関する科目」でもアクティブラーニングを取り入れたいと考える。

キーワード：鑑賞、指導、伝統工芸、絵画、アクティブラーニング

はじめに

本稿は、札幌大谷大学芸術学部美術学科の教育職員免許状取得の「教科に関する科目」の授業において、アクティブラーニングの手法を用いて鑑賞の授業を行った報告である。

札幌大谷大学の教職課程で生徒は中学校教諭一種と高等学校教諭一種(美術)の免許を取得することができ、筆者が担当する授業は鑑賞の指導を主眼とする。教職課程を履修している生徒は一部であるが、履修していない生徒も鑑賞の授業のなかで、教職の内容にふれることは重要である。

中学校学習指導要領の「鑑賞」の第1学年の授業の内容は

「(1)美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する次の事項を指導する。

- ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。
- イ 身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること。」¹

さらに第2及び第3学年の授業の内容は

- 「ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと。
- イ 美術作品などに取り入れられている自然のよさや、自然や身近な環境の中に見られる造形的な美しさなどを感じ取り、安らぎや自然との共生などの視点から、生活を美しく豊かにする美術の働きについて理解

¹ 文部科学省「中学校学習指導要領」東山書房、2013年、81頁。

すること。

ウ 日本の美術の概括的な変遷や作品の特質を調べたり、それらの作品を鑑賞したりして、日本の美術や伝統と文化に対する理解と愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違と共通性に気付き、それぞれのよさや美しさなどで味わい、美術を通じた国際理解を深め、美術文化の継承と創造への関心を高めること。』²

2 前掲書、82-83頁。

高等学校学習指導要領の美術 I の授業の内容で鑑賞は、次の事項を指導するとされている。

- 「ア 美術作品などのよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り、理解を深めること。
- イ 映像メディア表現の特質や表現の効果などを感じ取り、理解すること。
- ウ 自然と美術とのかかわり、生活や社会を心豊かにする美術の働きについて考え、理解を深めること。
- エ 日本の美術の歴史や表現の特質、日本及び諸外国の美術文化について理解を深めること。」³

3 文部科学省「高等学校学習指導要領」東山書房、2015年、101頁。

とある。しかし、従来どおりのパワーポイントやスライドだけの一方的な解説だけでは、これらの目標を十分に達成することは出来ない。それ故今回、昨年11月9日札幌大谷大学におけるFD研修会⁴において具体的に内容を知ったアクティブラーニングを使いながら、日本の伝統美術と絵画と西洋美術の鑑賞講義を第1学年を中心とする「西洋美術史B」と第3学年を中心とする「美術鑑賞論」において実践を試みた。

4 FD研修会「札幌大谷大学のミライを考えるワークショップ③」2016年11月9日 於札幌大谷大学北棟大教室。

アクティブラーニングは以下のように定義されている。

「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である。」⁵

5 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」文部科学省、2012年、37頁。アクティブラーニングについては、中井俊樹編著「アクティブラーニング」(シリーズ 大学の教授法 3)玉川大学出版部、2015年を参照。

この定義にそって、講義は具体的に次のように計画した。

1. テーマの選択
2. パワーポイントなどの映像メディアで美術史の講義
3. 席を移動しながらの鑑賞
4. グループ・ディスカッション
5. ミニツツペーパーに記述
6. 授業時間外学習の指示

以下、上記の内容をいかに実施したかを述べる。

1. テーマの選択

テーマの選択は教師が行い、着席している生徒たちにテーマと当日の手順を説明した。今回教師が選んだテーマは、「日本の伝統工芸と絵画の鑑賞」であり、数ある日本の伝統工芸の中から、「九谷焼」を選択した。具体的には、九谷焼の美術史的背景と技法を踏まえ鑑賞することである。美術史において、比較はもっとも有効な手段の一つであるので、「九谷焼と清水焼」「九谷焼とヨーロッパ・ロココ様式の陶磁器」のそれぞれの実物を見せながら比較した。教師が持参したのは清水焼と九谷焼のご飯茶碗と、石川県美術館所蔵の代表的な古九谷を模倣した現代の九谷焼の小皿5枚とロカイユ装飾が施された現代のロココ様式の皿である。講義では、「日本の美術の歴史や表現の特質、日本及び諸外国の美術文化について理解を深めること」⁶と、九谷焼の特徴を深く理解するために、日本の絵画と陶磁器、ヨーロッパ・ロココ様式の絵画と陶磁器を比較しながら解説した。

6 文部科学省 前掲「高等学校学習指導要領」101頁。

「九谷焼」のテーマを選択した理由は、第1に2015年3月に北陸新幹線が開通してから、テレビや雑誌などのマスコミに俄然金沢市をはじめとする石川県の文化が宣伝され、北陸の文化への生徒たちの関心も高いこと、第2に日本の伝統工芸の中でも加賀前田家百万石であった石川県の工芸は高い水準を誇ることで、第3に金沢市は筆者が中学から高校時代をすごした第二の故郷ゆえ愛着もあり、またその地に住んだ体験により知り得た文化を生徒に伝授したいという思いからであった。実際、実体験に基づいた話は説得力を持つと考える。

なお、江戸時代前期の九谷焼は、後の再興九谷と区別され古九谷と呼ばれ、生産地には加賀説と肥後説があるが、ここでは論じない。金沢において、九谷焼が人々の生活に浸透している事が重要であると考えられているからである。

2. パワーポイントによる当時の美術史の講義

パワーポイントを映写し、用語や制作過程を図示したプリントを配布し、当時の美術史と陶磁器の技法を解説した。その際、映像で制作の工程を見せながら陶磁器の技法も解説した。次の鑑賞の時間に、生徒に手にとってもらう教師が持参した九谷焼と清水焼の椀や皿とロココ様式の皿の実物を教卓から見せながら、生徒の注意を促した。

限られた時間でもあり、多すぎる情報は生徒の思考の混乱を招くので、膨大な美術史の中から、重要な部分をかいつまんで紹介した。教師は美術史を講義するにあたって、単に歴史的な事実の紹介にとどまらず、九谷焼を中心に自分の実体験を語ることに努めた。

◎陶磁器の歴史

最初に陶磁器の言葉の定義を教授した。陶器は「釉薬をかけた焼物で、素地にガラス質を含み、少し吸水性があり、たたいて鈍い堅い音がするもの。」⁷ 磁器は「硬質の焼物。素地のガラス質が磁化して半透明となり、吸水性がほとんどなく、叩くと金属的な冴えた音を発する。」⁸ 英語でも pottery と porcelain のように区別されるものであるが、生徒のほとんどはこの違いを知らなかったので、美術辞典の使い方なども併せて指導した。陶磁器の歴史を概観することは、普段あまり学ぶことの少ない東アジアの美術文化も紹介することになった。日本の陶磁器の歴史の紹介では、絵画の陶磁器への影響も解説することにより、当時の絵画も概観することになった。

次に九谷焼の歴史と技術の伝統を解説した⁹。作品制作を専門にする生徒たちのために制作工程と技法は丁寧に講義した¹⁰。また筆者が金沢で生活した際の実体験を紹介した。

生徒たちの世代にあって、九谷焼を日常的に使うことは少ないであろうが、現在でも金沢市の家庭では、九谷焼は日常的に使用されている。ただし、九谷焼に料理を盛るようになったのは、それほど古いことではなく、かつて江戸時代は現在の石川県立美術館で展示されているのと同様の支持具を使った形で愛でられていた事などである。

次に日本の伝統工芸と比較するために筆者の長年の研究テーマでもあるヨーロッパ18世紀のロココ様式の美術、とくに絵画と陶磁器の工芸を紹介した¹¹。フランスのセーヴル窯の磁器は、マイセン窯とともにヨーロッパの磁器芸術の最高峰と位置づけられる。中国や日本やマイセンの磁器は、カオリンという磁土を素地に含む焼成温度が高い硬質磁器であるが、18世紀のフランスの磁器は、ガラス質の粉を混ぜた白く半透明の素地で、焼成温度が低い軟質磁器である。セーヴル窯で真の硬質磁器が焼かれたのは1768年なので、ロココ時代のフランスの磁器の名品はほとんどが軟質磁器である。

時に装飾過多に見えるロココ様式の作品であるが、ロココ芸術はヨーロッパの他のどの時代にも比べても、総合芸術であり、絵画、工芸、彫刻のどの分野でも、個々を取り出して見るのではなく、その優雅な建築の中で、空間を構成するアンサンブルのひとつとして見られるべきものである。そして、日本の伝統工芸においても同じことが言えることを強調した。

3. 席を移動しながらの鑑賞

4～6人のグループに分かれて座席から移動し、教室の一番前の机に分散して置かれた工芸の実物を実際に手にとって、メモを取りながら鑑賞した。教師は時間を計りながら、グループが次の机に移動するのをうながした。

7 『新潮 世界美術辞典』新潮社、1985年初版、1005頁。

8 前掲書、628頁。

9 九谷焼の歴史については、北出不二雄「歴史と技術の伝統」『カラー日本のやきもの 14 九谷』淡交社、1975年初版、74～174頁、村瀬博春「古九谷コード 古九谷はアイコン(聖画像)だった」『北國文華 第34号』、北國新聞社、2007年、214～228頁ほかを参照。

10 九谷焼の歴史の制作課程と技法については、『九谷名品図録』石川県立美術館、2011年、嶋崎 丞「九谷焼＝歴代の作品でつづる九谷焼の歴史」石川県九谷陶磁器商工業協同組合連合会 1997年ほかを参照。

11 18世紀の工芸については、下濱晶子「フランス・ロココの彫刻と工芸」(坂本 満編『世界美術大全集』18)小学館、1996年、149～172、361～372頁、18世紀の絵画については、下濱晶子「ジャン＝オノレ・フラゴナール ぶらんこ」(鈴木杜幾子・森田義之編『逸楽のロココ』NHK日曜美術館 名画への旅 15)講談社、1993年、78～95頁ほかを参照。

(図1, 2, 3)

4. グループ・ディスカッション

グループの中でディスカッションを行った。ここでも、教師が時間を計った。ディスカッションを行う場所は、作品を手にとりながら机の前、次のグループと入れ替わって皿が置いてある机の後ろ、席に戻ってからなど、臨機応変に行った。(図4, 5)

学期も終わりに近づいている時期に実施した事もあり、教師と生徒、生徒同士はすでにうちとけており、アイスブレイクをする必要もなく、初めての試みであっても、円滑に進行する事が出来た。パワーポイントで解説したにもかかわらず、清水焼と九谷焼の区別がつかない生徒には、教師は回りながら助言を与えた。その際、感想を誘導することはせず、できるだけ客観的な助言になるように努めた。

5. ミニツツペーパーに記述

生徒はミニツツペーパーのアンケートに解答し、鑑賞後の感想などを記述した。(図6)
各講座における集計結果は以下ようになった。

第1学年必修科目(教職必修科目)の「西洋美術史B」では、回答者41人中

①「九谷焼と清水焼の違い(比較)」の問いに、

「色」の項目では、

「違う」36人(87.8%) 「どちらともいえない」2人(4.9%) 「同じ」3人(7.3%)

「模様」の項目では、

「違う」39人(95.1%) 「どちらともいえない」1人(2.4%) 「同じ」1人(2.4%)

「手触り」の項目では、

「違う」30人(73.2%) 「どちらともいえない」5人(12.2%) 「同じ」6人(14.6%)

「好み」の項目では、

「九谷焼の方がよい(好き)」 16人(39.0%)

「清水焼の方がよい(好き)」 13人(31.7%)

「どちらともいえない」 12人(29.3%)

②「ヨーロッパ・ロココ様式の陶磁器と九谷焼(の比較)」の問いに

「色」の項目では、

「違う」41人(100%) 「どちらともいえない」0人(0%) 「同じ」0人(0%)

「模様」の項目では、

「違う」38人(92.7%) 「どちらともいえない」1人(2.4%) 「同じ」2人(4.9%)

「手触り」の項目では、

「違う」23人(56.1%) 「どちらともいえない」14人(34.1%) 「同じ」4人(9.8%)

「好み」の項目では、

「ロココ様式の方がよい(好き)」 10人(24.4%)

「九谷焼の方がよい(好き)」 21人(51.2%)

「どちらともいえない」 10人(24.4%)

という結果になった。

第3学年選択科目(教職必修科目)の「美術鑑賞論」では、回答者全27人中

①「九谷焼と清水焼の違い(比較)」の問いに、

「色」の項目では、
「違う」15人(55.6%) 「どちらともいえない」8人(29.6%) 「同じ」4人(14.8%)
「模様」の項目では、
「違う」24人(88.9%) 「どちらともいえない」1人(3.7%) 「同じ」2人(7.4%)
「手触り」の項目では、
「違う」17人(63.0%) 「どちらともいえない」5人(18.5%) 「同じ」5人(18.5%)
「好み」の項目では、
「九谷焼の方がよい(好き)」 14人(51.9%)
「清水焼の方がよい(好き)」 8人(29.6%)
「どちらともいえない」 5人(18.5%)

②「ヨーロッパ・ロココ様式の陶磁器と九谷焼(の比較)」の問いに

「色」の項目では、
「違う」25人(92.6%) 「どちらともいえない」1人(3.7%) 「同じ」1人(3.7%)
「模様」の項目では、
「違う」23人(85.2%) 「どちらともいえない」2人(7.4%) 「同じ」2人(7.4%)
「手触り」の項目では、
「違う」16人(59.3%) 「どちらともいえない」5人(18.5%) 「同じ」6人(22.2%)
「好み」の項目では、
「ロココ様式の方がよい(好き)」 11人(40.7%)
「九谷焼の方がよい(好き)」 13人(48.2%)
「どちらともいえない」 3人(11.1%)

という結果になった。

この統計は、何が正解という事はなく、鑑賞し、実物を触り、ディスカッションをすることで、生徒ひとりひとりに鑑賞力がつくことがねらいであり、その目的は達せられた。

6. 授業時間外学習の指示

教師は、授業時間外学習の重要性を生徒に伝え、課題を与えた。「身近な地域……の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること」¹²や「生活や社会を心豊かにする美術の働きについて」¹³ 考えるという観点から、課題は「家などにある日本の食器を鑑賞する」というものにした。

12 文部科学省 前掲「中学校学習指導要領」81頁。

13 文部科学省 前掲「高等学校学習指導要領」101頁。

7. ミニツツペーパーのアンケートからわかること

鑑賞の授業についてミニツツペーパーの最後に書いた感想の抜粋を以下に記述する。

第1学年必修科目(教職必修科目)の「西洋美術史B」では、

◎アクティブラーニングの意義

- ・触り心地はもちろん、写真ではあまり見られない裏側や厚みなども見て感じる事ができた。
- ・遠目に見たり近くで見たりすることができることも違いを見つけるために必要であったと思う。
- ・実際の実物の美術作品をさわって、見る事でより理解が得られたと思います。事前にプリントの説明もあったので色の違い、塗り方の違いなど意識して見る事ができました。
- ・アンケートをとる形式も新鮮だと思いました。
- ・周りの人と意見を出し合い鑑賞したことはよい体験になった。
- ・日本史の教科書に載っているのを見ただけで、実際に本物の日本の伝統工芸品に触れたことがあまりなかった。

たので、見て、触って、その特徴をじかに感じる事ができたのでよい体験が出来たと思います！

- ・とてもよい体験ができました。ありがとうございました。
- ・おうとつなど、さわらないとわからないこともあるのでよかった。
- ・話を聞くだけでなく、実際に手で触れることで感覚が残り、印象的だった。
- ・技法もプリントで画像を交えて教えてもらえると実際に触ったとき、ああやって作られているんだな、と想像できたのでよかった。
- ・紙の資料があるとわかりやすく良い。
- ・見比べる機会はめったにないので楽しめました。
- ・実際に見たり、さわったりすることで、細かいところまで覚えることができた気がする。良かったです！
- ・実際に触れて感じることで、いつもよりもスッと情報が入ってきた気がしました。
- ・実際に見て触ってこそ、新たな発見や感想を持つことができるということを改めて知ることができました。
- ・今回、実際に生で見たことでより知識をつけることができ、これからの作品作りにいかしていきたい。
- ・さりげなく周りにあるものがより深く、ある意味身近に感じる事ができた。友達との感じ方の違いを見るのも楽しかった。
- ・触り心地はもちろん、写真ではあまり見られない裏側や厚みなども見て感じる事ができた。
- ・写真でみるよりも、肌ざわりや、発色の差など感じる事ができて、良かったです。
- ・周りの人と意見を出し合いながら鑑賞したことは、よい体験になったと思う。
- ・座学がほとんどでこういった実際にさわってみれたことはとてもためになりました。
- ・来年の授業も実際に触れる授業があったらありがたいなと思いました。
- ・今までにないタイプの講義でとても新鮮でした。またしてほしいです。

◎日本の伝統芸術・日本と外国の様式の違いについて

- ・やはり祖国の先人たちが生み出したこの文化や様式、美的感覚が好きだと思う。
- ・アジアの色というか、やはりヨーロッパとの色合いの違いを感じました。
- ・日本のものでありながら、伝統工芸、芸能……など知らないことが多いなと感じました。
- ・ヨーロッパの食器もカワイイですが、日本の食器にはあたたかみがあるように感じました。あの色合いは日本のなせる技だと思いました。
- ・焼き物にも、色々あることがわかって楽しかった。日本の焼き物の模様の計算されている美しさ、絶妙なバランスがすばらしい。くらべてみてわかることがあるのだと、あらためて知った。

◎今回のアクティブラーニングの課題点

- ・体験型でそれぞれの違いに興味があったが、一度に全員が作品の周りに集まるとじっくり見る事ができない。
- ・違いを比べる前に、個々をよく観察したい。
- ・実物をみれるのはよかったが、プリントがモノクロだと見づらい部分があった。
- ・実物を見るのに時間がかかったのは少しイヤでしたが、実物をさわる機会が出来て良いと思った。
- ・ローテーション形式にして作品を見て回るのは効率が悪く感じましたが、直接触れて比較することができて、良かったです。
- ・今回初めて聞いた言葉があったので、もう少し知ってみたいと思った。

第3学年の「美術鑑賞論」では、

◎アクティブラーニングの意義

- ・美術を鑑賞するうえで実物を手に取ってじっくり観察したり、他の物と比較して、理由を考えることは、大切な学びの経験になると思います。
- ・実際の工芸品を触って比べるということはなかなかないので、とても良かったです。
- ・実際に見て触るということは、新たな発見や作品に対しての知識が増えるので、とても良いし、いい経験で

した。

- ・実際に実物に触れることは中々無いので楽しかった。
- ・実際にさわると楽しく、どう違うのか自分で考えるため記憶に残りそうです。
- ・実物を見せてもらう機会は中々ないので貴重だった。
- ・自ら作品を調べたとしても実際に目で見て触れることは中々できるものではないため大変新鮮で楽しかった。
- ・実際に作品に触れることで違いや手触り、色を生で感じる事が出来たのでとても勉強になりました。またこうした機会を設けてもらえたら嬉しいです。
- ・実際にさわることができたので記憶に残りそうです。
- ・実際に触って比べるなどの機会は今まであまり無かったので、貴重な経験になりました。
- ・聞くより実物を見て比べるほうが覚えられそうです。
- ・実際に触れることで話だけでは分からないことを感じる事ができました。スケール感や目で見えた色、手触りや艶は自分の目でみないとわからないので良い経験になりました。
- ・実際に触れて作品のよさを感じ取ることで、より深く印象に残りました。焼き物の知識はあまりありませんでしたが、模様や持ち上げた触り心地でこんなに違いがあるんだということを初めて感じました。今まで立体作品や皿、つぼのような展示物は美術館でもじっくり見ることはなかったので、これからは今日習ったことを思い出しながら鑑賞していこうと思います。

◎日本の伝統芸術・日本と外国の様式の違いについて

- ・九谷焼の技法だったり、ロココ様式(の陶磁器)とも描き方が全然違うということを知ることができました。
- ・陶磁器の違いを日本人なら分かっておきたかったので、よい講義だった。
- ・色々な物の比較ができて面白かったです。

おわりに

今回アクティブラーニングの手法を知り実践するまでの日程が短かったため、授業で試みたのは、二講義であった。その中から課題点として、1. 多人数の生徒が歩きながら鑑賞するには、教室の机と机の間に十分な空間が必要である。2. 講義する際、特に大きな教室では、教師が教室の後方まで歩きながら説明する必要がある。3. 時間配分にはタイマーなどを使用した方が有効である。4. ミニッツペーパーの感想や授業時間外学習をフィードバックする時間を今後設ける事などが挙げられる。

1から3の課題点では具体的に、生徒から周りながら作品を見るのに机と机の間が狭いという意見が出たからである。また、講義でパワーポイントで説明していたにもかかわらず、後方の座席の生徒に実物は見えにくいのもあってか、どちらの腕が清水焼で九谷焼なのか理解しないまま、鑑賞時間に入ってしまった生徒が何人かいた。講義する際、特に大きな教室では、教師が教室の後方まで歩きながら説明する必要があると感じた。また、鑑賞やディスカッションの時間の測定には、教師の携帯電話を使用した方が、ディスカッションに熱が入ると時間が伸びるので、次回はタイマーなどを使い音を鳴らした方が、生徒全員に時間がわかるのでよいと考えた。

今回のアクティブラーニングから分かったことは、

1. パワーポイントなどの映像メディアによって、日本の伝統美術の歴史と技法を学ぶことで広く「アジアの美術についても扱う」ことができた。2. 日本と西洋の美術の違いが認識できるようになった。3. 実用化されている伝統工芸を鑑賞する事で、「生活や社会を心豊かにする美術の働きについて」理解を深められた。4. 美術館・博物館を活用する際の基本的知識とマナーを学べた。5. グループ・ディスカッションにより「作品について互いに批評し合う活動を取り入れる」ことができた。6. ほぼ全員の生徒が実物を手に取って鑑賞することや比較して鑑賞することが有意義であると考え、多くの生徒がまたこのような方法で授業を受けたいと述べたことなど大きな成果を挙げる事ができた。

1と2と3は、中学校学習指導要領の「生活における美術の働きなど」¹⁴や「美術作品などに取り入れられている

14 文部科学省 前掲「中学校学習指導要領」81頁。

- 15 文部科学省 前掲「中学校学習指導要領」82頁。
16 文部科学省 前掲「高等学校学習指導要領」101頁。
17 文部科学省 前掲「高等学校学習指導要領」102頁。

自然のよさ」¹⁵を感じることや高等学校学習指導要領の「日本の美術の歴史や表現の特質，日本及び諸外国の美術文化について理解を深めること。」¹⁶「日本の美術も重視して扱うとともに，アジアの美術などについても扱うようにする。」¹⁷ことが，陶磁器の変遷を追う美術史の講義で言及できた。また金沢の伝統工芸を紹介することにより，古都金沢の人々の生活に浸透している「おもてなしの心」も伝授することができた。北海道内の外国人来道者は年々増え続けており，2020年には東京オリンピックも開催される中，若い世代が多い生徒たちが美術の授業を通して日本の伝統文化を学び伝えることは有意義であると考えられる。

- 18 文部科学省 前掲「中学校学習指導要領」84頁。

4では，中学校学習指導要領の鑑賞の「内容の取扱い」では，「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること。」¹⁸とあるが，今回のアクティブラーニングでは，作品の実物を鑑賞の対象としたため，美術館・博物館における基本的マナーなども伝授することができた。マナーとは，美術館でメモを取る時は，作品に万一インクを被ってはいけなないので，万年筆やボールペンは禁止，作品を手にする時は手袋をはめる・ハンカチで口を覆うなどである。大谷大学では現在博物館の学芸員資格をとる選択は無いが，筆者が学芸員資格をとった際の博物館実習で学んだ事を，実物の作品鑑賞というアクティブラーニングの授業の中に織り込む事ができたのはよかった。

5と6で，4～6人程度の少人数のグループに分けたのは，陶磁器を手に取りやすく鑑賞しやすいようにという配慮であったが，実際に実践してみると，少人数だと，活発な議論がしあえ，刺激を受けた生徒同士，違う意見や感想を知ることができ，よりよい結果を得ることができた。ディスカッションも，最初は鑑賞後，机に戻って行う予定であったが，作品を手にしていきいきと意見を交換している様子を見て，作品の周りで実際に鑑賞しながらディスカッションするように変更した。

以上のように，教職課程を専攻していない生徒も，アクティブラーニングで教職の鑑賞の授業にふれ，伝えることの難しさや楽しさを学ぶことができた。

今後は，今回の結果を踏まえさまざまなテーマで，担当している他の「教科に関する科目」でもアクティブラーニングを取り入れたいと考える。



図1 実物を手にとってディスカッション



図2 皿の裏側も鑑賞



図3 皿の薄さや手触りを確認



図4 グループ同士で鑑賞とディスカッション



図5 グループが場所を入れ替わって鑑賞



図6 座席に戻り最後はミニツペーパーに感想を記述